HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	松枝, 大治; 星野, 祐子
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 17
Issue Date	2008-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49236
Type	book
File Information	MuseumNews_17.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

17 号

ISSN 1345-059X

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学総合博物館ニュース

G8北海道洞爺湖サミットにむけた総合博物館の試み

北海道大学はG8北海道洞爺湖サミットに合わせて“サステナビリティ・ウィーク”を設定し、シンポジウムや講演会などを集中的に開催しているところですが、北海道大学附属総合博物館では3つの関連行事を行っています。

まず一つ目は、「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」と題する展示で、すでに6月17日（火）から3階企画展示室で始まっています（8月30日（土）まで）。G8北海道洞爺湖サミットが開催される地域は、過去に様々な人間活動が展開されてきた場所であり、そこに広がる生態系、水、火山、地質といった「自然環境」や、鉱物、エネルギー、食糧といった多様な「資源」に加え、「自然災害」等が人間の文化や歴史を培い、深く関わってきました。その姿を総合的に展示することで、自然と人間の関わりを見直してみようという試みです。御覧になられた方々には、ご感想ご意見をお寄せいただければ幸いです。

2つめは、すでに6月28日（土）～29日（日）に開催されたシンポジウム「分類学の帰還」（Symposium “Taxonomy Returns”）です。このシンポジウムは、自然を理解することを目的にした国際シンポジウムで、講演者の一人に国際動物命名法審議会の会長デニス・ブラザース氏（南アフリカ・クワズルナタル大学・教授）をお迎えし、6月28日（土）は日本語による一般向けの講演会「生き物に名前を付ける」を、翌6月29日（日）は英語による専門家向けワークショップ「Toward the future development of Zoological Nomenclature」を開催しました。講演会「生き物に名前を付ける」は、生き物の名前に興味をお持ちの一般の方、アマチュア研究者の方、学生、そして専門家、すべての方々を対象とした、生物の学名に関する講演会で、生物の学名はどのように付けられ、また管理され、改訂されているかを、まずは国際動物命名法審議会のデニス・ブラザース会長にやさしく話していただきました。彼の英語の講演には同時通訳を用意しました。引き続き、3人の大学研究者に、学名が変更される場合の規約の解釈、および提案書Proposalの書き方、さらには命名法に関する新しい提唱等々を、実例に基づいて詳しくお話していただきました。最後に、つい最近改訂されました国際植物命名規約最新版「ウィーン規約」について、その日本語版の翻訳者のお一人に解説していただきました。たくさんの参加者の皆様には、学名に関する理解を深めていただいたことと思います。6月29日（日）に開催された専門家向けワークショップは、英語で行われたこともあって参加者こそ多くはありませんでしたが、国際動物命名規約の将来について活発な意見が交わされ、きわめて有意義な会であったと手前味噌ながら評価しています。

G8北海道洞爺湖サミットに合わせて総合博物館が3つ目に行ったことは、英語のパンフレットの作成と展示内容を英語で解説したパネルの各展示室への設置です。G8北海道洞爺湖サミットの前後には海外からの関係者や観光客の増加が見込まれます。それらの方々に展示内容を理解していただき、北海道大学を知っていただきたいとの総合博物館の希望が実現したわけです。6月中にも普段より多くの外国人の方が北大のキャンパスと総合博物館を訪問されています。7月にはさらに多くの方々が来訪されることを願っております。

馬渡駿介（館長／動物分類学）

目　次

ページ 1：・G8北海道洞爺湖サミットにむけた総合博物館の試み
ページ 2：・2008年G8北海道洞爺湖サミット関連企画展示
・「分子のかたち展―サイエンス×アート」ワークショップ報告と展示予告
ページ 3：・第52回企画展示「水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史」
・第53回企画展示「ウズベキスタンの現代建築と世界遺産」
ページ 4：・第54回企画展示「黒曜岩展示」
・第55回企画展示「ボタニカル・アート展―植物学と芸術の出会い―」
ページ 5：・第56回企画展示　北海道大学教職員写真同好会第10回写真展『しあわせのかたち』
・藤田正一氏退官記念講演
ページ 6：・IODP普及キャンペーン「地球の記憶を掘り起こせ！～深海掘削でひも解く地球温暖化～」
・シンポジウム「北東アジアの植物多様性：被子植物の分類・地理」
ページ 7：・シンポジウム「中世日本列島北部－サハリンにおける民族の形成過程の解明―市場経済圏拡大の観点から―」
・大学院授業における展示評価とリニューアル提案の取り組み
ページ 8：・「ロボットフィールドプロデュース」を開催
・北大カフェプロジェクト@総合博物館
ページ 9：・2007年度「ボランティア講座＆交流会」を開催
・カルチャーナイト2008「チェンバロと星空の夕べ」
ページ10：・セミナー（19年10月～20年3月）
・シンポジウム（19年10月～20年3月）
ページ11：・COEパラタクソノミスト講座（19年10月～20年3月）
・主な出来事（19年10月～20年3月）
・ミュージアムショップに新商品が加わりました
ページ12：・入館者数（19年10月～20年3月）
・お知らせ
・お礼

Jul . 2008
ISSUE 17

北海道大学総合博物館　　2008年7月発行

2008年G8北海道洞爺湖サミット関連企画展示
「洞爺湖·有珠火山地域の環境と資源」展

平成20年6月17日から同8月30日までの予定で、総合博物館3階企画展示室において「洞爺湖·有珠火山地域の環境と資源」展が始まりました。この展示は、2008年7月7～9日の3日間に洞爺湖近郊において開催される2008年G8北海道洞爺湖サミット関連の企画展示です。

洞爺湖サミット会場となる洞爺湖·有珠火山地域は、豊かな自然と資源に恵まれた場所で、過去から様々な人間活動が展開されてきた場所でもあります。そこに広がる生態系、水、火山、地質などの「自然環境」や、鉱物、エネルギー、食糧などの多様な「資源」がこれまで人間の文化や歴史を培ってきました。一方で、火山噴火や地震などの「自然災害」や人間活動によって生じた環境汚染などの「公害」等、本地域の多様で変動する自然環境と深く関わりながら共生してきた姿を縮図として展示し、改めて21世紀の人類に課せられた「環境と資源問題」を考え直したいというのがこの企画展示の趣旨です。

6月17日のオープニング·セレモニーには、佐伯　浩総長、本堂武夫理事（サミット関連企画本部実行委員長）及び馬渡駿介館長を始め多数の関係者の方々が出席されました。セレモニー終了後、アインシュタイン·ドームの展示室入り口前でテープカットを行い、引き続きマスコミ報道関係者も含めた見学者に対して、展示担当者がそれぞれの展示内容について説明を行い、大変好評でした。



佐伯総長のご祝辞

展示は、生態系（プランクトン、魚類、鳥類、植物等）·水環境·地質·遺跡·火山·避難生活など多岐にわたるものとなっていますが、単にパネル展示に留まらず、地形模型、衛星画像（立体画像等を含む）、実物や剥製展示、顕微鏡設置、避難生活の再現、パソコン動画や地震計を用いた体験型の展示となっており、来館者にも十分楽しんで頂けるものとなっています。このほか、3回にわたる土曜市民セミナー、シンポジウム「有珠山と共に生きる」や低学年層対象の「美味しい！　楽しい！　火山教室」など、多数の関連イベントも予定されています。

開催期間中に多数の方々がご来館になり展示を楽しんで頂くと共に、この展示を通じて「環境と資源問題」を自ら考えて頂ければと願っています。

松枝大治
（研究部長·教授／鉱物学·鉱床学）



テープカット

「分子のかたち展―サイエンス×アート」
ワークショップ報告と展示予告

「分子」というキーワードは、実はテレビCMや健康食品のパッケージなどで私たちが毎日のように触れているのですが、一般的には「難しい」「複雑で、なにを勉強してよいかわからない」という印象を与えることが多いようです。毎日の食事や飲料、吸っては吐く空気はもとより、私たちのからだを作っているものは全て「分子」です。皆さんの一人一人が自分のからだのミクロな仕組みに興味を持ち少しでも理解を深めることで、より安心で快適な生活を送ることができるのではないでしょうか。

北大総合博物館2008年夏の企画展示「分子のかたち展―サイエンス×アート」では、そうした分子の「かたち」にスポットを当て、アートの力を借りることにより、直感的に興味を持て、見たり触ったりすることで楽しく分子の理解を深められる展示を行います。これまで札幌を中心に活躍するアーティストと、分子を研究するサイエンティストによるワークショップを全12回（講師は7人）行いました。粘菌の細胞分化に関わる分子、様々な鉱物を構成する分子、味や香りと分子のかたちの関係、タンパク質のかたちとその働きの関係、バラエティに富むかたちを持つ雪の結晶と水分子の関係についての話題提供があり、ワークショップには延べ19名のアーティストが参加しました。展示は7月15日（火）より行われます。アートの力を借りてより親しみやすくなった分子のかたちに触れ、一人でも多くの分子ファンが増えてくれることを期待しています。

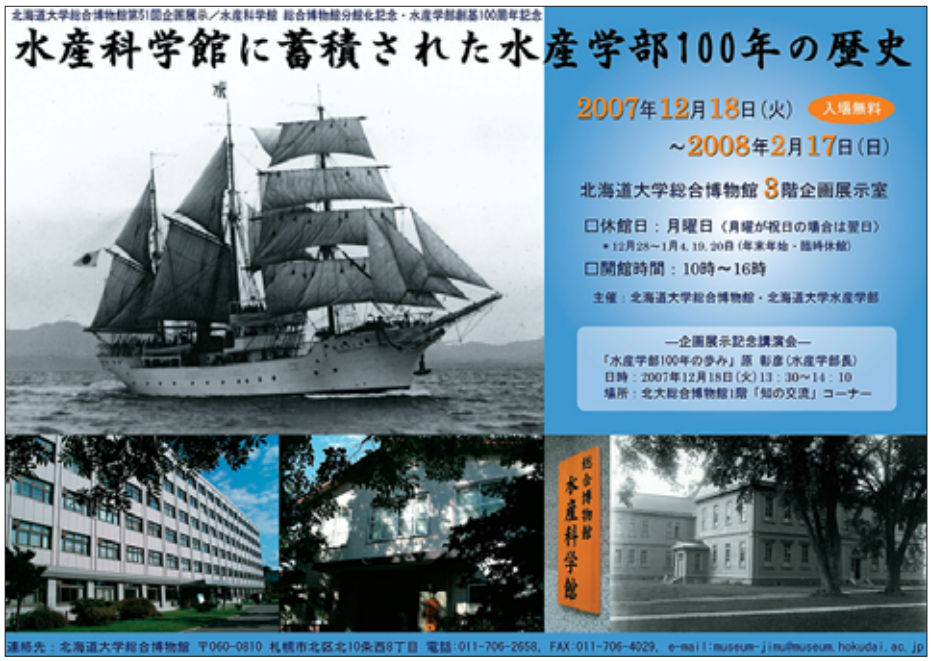


ポスター

小俣友輝
（研究部助教／博物館情報科学）

第52回企画展示
「水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史」

第52回企画展示「水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史」を平成19年12月18日から平成20年2月17日まで3階企画展示室で開催しました。水産科学館は水産学部の施設として一般に公開されてきましたが、平成19年4月1日に正式に総合博物館の分館として位置づけられました。一方、平成19年は水産学部の前身である水産学科が札幌農学校に設置されてから100年目の年でした。本企画展示は、水産科学館の総合博物館の分館化を記念するとともに、水産学部創基100周年を記念して水産学部とともに企画されたもので、水産科学館に保存されている明治時代の和船模型、クジラ類などの水産加工品、おしょろ丸などの歴代練習船の関係資料などをパネルとともに展示し、これらを通して水産学部100年の歴史を紹介しました。



ポスター

開催初日にはオープニングセレモニーを行うとともに、原彰彦水産学部長による講演会「水産学部100年の歴史」を開催し、こちらも大変好評でした。

今村　央
（研究部准教授／魚類分類学）

第53回企画展示
「ウズベキスタンの現代建築と世界遺産」


展示コーナー入口

今回開催された「ウズベキスタンの現代建築と世界遺産」は、香川大学、駐日ウズベキスタン大使館、ウズベキスタン文化·芸術フォーラム基金、北大スラブ研究センターの共催により、平成20年1月22日から2月24日まで総合博物館で開催したものです。この展示で使われたウズベキスタンの現代建築と世界遺産の写真は、香川大学が中心となって全国に巡回されていたものです。それを中核にし、スラブ研究センターと総合博物館によって展示内容をアレンジしました。

ウズベキスタンは、中央アジアの中核を占め、シルクロードの中心都市として有名なサマルカンド、聖なる古都ブハラ、神秘の都ヒヴァ、ティムールの故郷シャフリサブズなど、世界遺産の多い国として知られています。一方ではソ連邦から独立して15周年を迎え、新しい国づくりの面で更なる飛躍が期待されているところです。特に現代建築の分野では、東西文明の交差点から生まれた歴史的·文化的な文脈を大切に生かした実例も多く、今日の日本建築における「無機的で、ハイテク調」の流行に一石を投ずるものです。この展示は、ウズベキスタンの新しい国づくりの姿やウズベキスタンにおける建築文化の一端を紹介するもので、両国の国際交流の発展に寄与することを望むものでもあります。また、北海道大学スラブ研究センターが行っているこの地域の研究を紹介しながら、ウズベキスタンの重要性を展示しました。

展示内容は、ウズベキスタンの生活の紹介、現代建築と世界遺産、スラブ研究センターの紹介の、大きく三つで構成されていました。生活のコーナーでは、スラブ研究センターの菊田悠研究員や宇山智彦教授が所有している洋服や刺繍布など、神奈川県在住の所澤貞雄氏から陶器やコーラン台などを借用し展示しました。現代建築と世界遺産のコーナーは北大工学部の池上重康助教の協力により完成されました。スラブ研究センターの紹介のコーナーでは、スラブ研究センターの歴史や現在行っている研究をパネルにして展示しセンターの紹介をしました。また、2月16日にはスラブ研究センターの菊田悠研究員と宇山智彦教授により「陶器からみたウズベキスタン」という講演が行われ、陶器がいかにウズベキスタン文化と密接に繋がっているのかを紹介してもらいました。


展示の様子

展示されたウズベキスタンの工芸品の一部には鮮やかなコバルトブルーを使ったものがあり、また建築の写真は青空と建物に使われている青が非常に美しく、来館されてた方々を魅了しました。この展示によって、ウズベキスタンに興味を持った方がたくさんいたようです。

小林快次
（研究部助教／古生物学）

第54回企画展示
「黒曜岩展示」

総合博物館では、企画展示「黒曜岩展示」を1月15日（火）から3月31日（月）まで3階、アインシュタイン・ドーム下の回廊で開催しました。

平成19年（2007年）8月、鳥取大学名誉教授吉谷昭信先生が、長年にわたって全国の黒曜岩を採取研究されてこられた貴重なコレクションを北大総合博物館に寄贈されました。寄贈を受けた吉谷コレクションは、採取地約400地点、標本点数約1,500点あり、全て日本各地の産地が確定しているもので、全標本の主成分・微量成分化学組成が明らかにされており、地質学的のみならず考古学的にも貴重な学術的価値の高い標本群です。これらの標本の産地を北海道・東北・九州など、大まかに7つのブロックに分類し、登録の収蔵作業を行いました。

今回展示した黒曜岩は、一部を除いて、今後小中学校等を対象にした黒曜岩セミナーを開催する為に、特に石器製作用および直接手に触れることが出来るような目的で、博物館の標本とは別に教材として寄贈を受けたものです。出土地は日本中の各地方を網羅しており、十勝石の名で親しまれている地元産のものも多く含まれています。教材としての使用は勿論ですが、石器製作等をすると当然ながら原形を留めなくなりますので、その前に子供用コレクションとして展示を計画しました。黒曜岩はガラス質で、特に破断面の角は切れ味鋭い刃物と同じですから、危険防止のためケース内の展示に留めました。

企画展示の期間は終了しましたが、この夏に開催を企画しています前述の黒曜岩セミナーまで、もうしばらくこのまま展示する予定です。

松枝大治
（研究部部長・教授／鉱物学・鉱床学）



黒曜岩の展示風景



代表的な黒曜岩標本

第55回企画展示
「ボタニカル・アート展 ―植物学と芸術の出会い―」

2008年3月4日から4月13日まで、1階「知の統合コーナー」において、第55回企画展示「ボタニカル・アート展―植物学と芸術の出会い―」を開催しました。本展示は、本学理学部元助手の鮫島淳一郎氏の手になる日本産・北米産のエンレイソウ属植物の植物画49点と、鮫島氏の学位論文の元原稿や『エンレイソウ属図譜』の原図や植物押葉標本をメイン展示としたものでした。北大の校章にもなっているオオバナノエンレイソウ、そして北大研究者達が中心となって繰り広げられたエンレイソウ研究の長い道のりに思いをはせてもらおうと企画しました。併せて、札幌市内の植物画家集団が、一般市民にもなじみの深い種類の植物画40点を展示し、札幌の春を先取りした企画展としました。会場では植物画に近づいて熱心に鑑賞する市民の姿が見られました。



なお、今回展示された鮫島氏の植物画と資料類が総合博物館に寄贈されました。この場を借りてお礼申し上げます。

高橋英樹
（研究部教授／植物体系学）

第56回企画展示

北海道大学教職員写真同好会第10回写真展『しあわせのかたち』

総合博物館では、総合博物館企画展示「北海道大学教職員写真同好会第10回写真展『しあわせのかたち』」を、3月11日（火）から3月30日（日）まで開催しました。

『写真には人の心を動かす力があって、見た人を笑顔に、元気に、そしてしあわせな気持ちになってもらいたいという思いから企画した写真展です。写真同好会のメンバーが何気なく過ごす毎日の中で見つけた「しあわせ」を約60点展示しました。実施したアンケートには「気分が落ち込んでいたので本当に元気になりました。この写真展に出会えて良かったです。」「私達の身の回りには普段気づかない幸せがたくさんあることがわかりました。」という言葉が寄せられ、改めて写真の力に驚かされました。

また、特別展として「空から見た北大キャンパス」展を同時に開催しました。これは北大キャンパスは空から眺めるとどのように見えるのだろうという発想から、構内の建物屋上へ上り、撮影した作品を集めたものです。普段見ることの出来ない眺めに多くの方々が立ち止まり、関心している姿が印象的でした。今回は「第一章　秋編」として展示しましたが、今後は季節を変えて再度開催したいと考えています。（教職員写真同好会代表）』

写真展はこれまで博物館では、第4回「2004年作品展」（2005年1−2月）、第6回「四季彩色」（2006年1−2月）、第8回「Sapporo NaturArt」（2007年1−2月）が行われ市民の皆様から大変好評を得ています。今回は展示期間が短いにもかかわらず3,400人を越える人々が来館されました。今後の活動にご期待ください。

（総合博物館）





展示の様子

藤田正一氏退官記念講演

2008年3月19日水曜日、理学部本館N305室において、北大総合博物館・前館長の藤田正一氏による退官記念講演が行われました。藤田先生は、全国の大学博物館等で行われている学術的なアクティビティを公開する場としての博物科学会の発足、北大創基130周年企画展示の提案、総合博物館ウッドデッキにて行う芸術文化交流活動「Music in Museum」の創案、動物骨格展示の導入による展示の多角化、平成遠友夜学校の創立による大学と地域社会のつながりの強化など、総合博物館が北大と社会の橋渡しとなり、グローバルに活動を繰り広げる「場」の創設に尽力され、その功績は多大なるものがあります。

その藤田先生による総合博物館での最終講演のタイトルは「青春に悔いなし—『都ぞ弥生』『We Shall Overcome』『戦場にかける橋』そして『都ぞ弥生』再び—」。この講演は、先生が「自ら選んだ波乱の半生を多いに語る」というあまり聞くことのできない貴重な機会であり、会場には100人に迫る様々な聴講者が集まりました。

当日語られた内容はまさに藤田先生の半生を綴ったもので、涙あり笑いあり、またたくさんの心打つ出会いと別れに満ちたものでした。下に講演要旨を記します。

ー特に貧しいというわけではない。普通の家庭に育った。湘南高校3年生のときに聞いた北大恵迪寮寮歌「都ぞ弥生」に憧れ北大へ、恵迪寮に入寮、応援団での磊落な日々、団長、卒業後アメリカ留学、緑茂れるオレゴンでの豊かな日々、皿洗い、掃除人、メールマン、キング牧師の死、ベトナム反戦運動、1970年オレゴン市民の「沖縄からの毒ガス返還反対運動」に対するたった一人の「毒ガス無毒化」運動、ニューヨークアルバート・アインスタイン医科大学、ユダヤ文化との出会い、薬理学試験落第点、博士論文、ユダヤ女性との恋、ワールドトレードセンター最上階のレストランで聞いた「戦場にかける橋」、帰国、千葉大薬学部助教授、北大獣医学部教授、評議員、学部長、総長補佐、副学長、博物館館長、副学長のとき、一年生向け総合講義「北海道大学の人と学問」で北大の歴史を語り『都ぞ弥生』を歌う。4年後、この講義を聴いた経済学部の学生が卒業に際して面会に来る。「先生の書かれた『北海道大学に通底する精神と教育思想の歴史』を泣きながら読みました。」という熱血漢。2年後、彼の死、葬送に歌った「都ぞ弥生」とエール。藤田氏はまだ青春真っ只中。ー



講演の様子

講演は休憩をはさんで3時間に及びましたが、その波瀾万丈の人生の物語に飽きることはなく、来場された全ての方が充実した時間を過ごしました。先生のたくさんの土地や人々との出会いについての思い出を聞くことができ、先生に影響を受けた若者の一人として、大変貴重な体験でありました。藤田先生に心からのお礼とエールを送らせていただきます。

小俣友輝

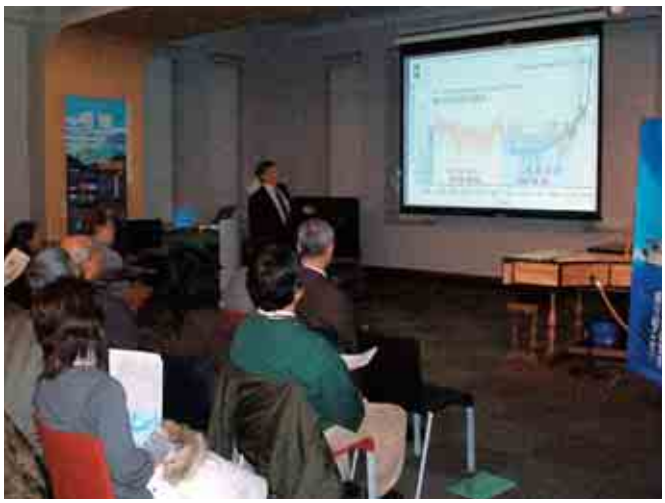
（研究部助教／博物館情報科学）

IODP普及キャンペーン
「地球の記憶を掘り起こせ！ ～深海掘削でひも解く地球温暖化～」

2008年3月1日（土）に統合国際深海掘削計画（IODP）の普及講演会を、日本地球掘削科学コンソーシアム（J-DESC）、海洋研究開発機構（JAMSTEC）、北海道大学・北海道大学21世紀COEプログラム「新・自然史科学創成」共催で、総合博物館1階・知の交流コーナーにて開催しました。これに関連して2月13日（水）～3月2日（日）、同館2階においてミニ展示を開設し、掘削船「ちきゅう」の模型や掘削されたコアの展示を行いました。

講演会ではミシガン大学名誉教授のテッド・ムーア博士が『温暖地球の歴史』の題目で講演し、北極に氷のない頃の過去の地球の環境は、どんなものだったかを紹介してくれました。次に、北海道大学名誉教授の小泉　格先生が、深海掘削の目的と意義について解説し（『地球について、もっと知りたい！―IODPで何がわかる？―』）、JAMSTECの長谷部喜八氏が掘削船「ちきゅう」とはどのような船なのか、クイズを交えて楽しく紹介しました（『「ちきゅう」ってどんな船？～地球深部探査船「ちきゅう」について』）。講演会には60名以上の参加があり、参加者は講演内容に関して質問をするなど、盛況のうちに講演会を終了することができました。現在、地球の温暖化が問題になっていますが、このような世界規模の環境問題に対して、過去の堆積物を調べることにより解決策を探ろうとする深海掘削計画の目的の一端を理解してもらえたことと思います。

西　弘嗣
（理学研究院／自然史科学部門准教授）
梅津慶太
（地球科学技術総合推進機構：AESTO／科学掘削推進部）



講演の様子：テッド・ムーア博士



掘削船「ちきゅう」の模型

総合博物館国際（公開）シンポジウム
「北東アジアの植物多様性：被子植物の分類・地理」

平成20年1月13日、総合博物館1階「知の交流」コーナーにおいて、国際シンポジウム「北東アジアの植物多様性：被子植物の分類・地理」が開かれました。ロシア科学アカデミー極東支部生物学・土壌学研究所研究員・総合博物館特任教授のYakubov博士を中心に、兵庫県立人と自然の博物館の福田知子学芸員、総合博物館の高橋英樹、農学研究院院生の村上麻季と佐藤広行の計5名が、日本周辺、ロシア極東地域の被子植物の多様性について講演しました。取り上げられた植物群は、バラ科キジムシロ属、ラン科アツモリソウ属、キク科ヨモギ属、イネ科チシマガリヤス類、ミカン科ミヤマシキミでした。3時間に及ぶ講演の間、市民学生等約60名が熱心に受講しました。

高橋英樹
（研究部教授／植物体系学）



講演するYakubov氏。左隣は通訳の福田知子氏



ポスター

総合博物館国際(公開)シンポジウム
文部科学省特別研究促進費研究成果公開事業シンポジウム

「中世日本列島北部ーサハリンにおける民族の形成過程の解明 ―市場経済圏拡大の観点から―」

アイヌ文化·民族を対象として列島北部ーサハリンーアムール下流域における中世社会·民族形成の過程の解明に取り組みました。特にオホーツク集団·和人集団との関係を追求して、アイヌ文化·民族の多系性·多元性を明らかにすることを目的として2月9日に下記のシンポジウムを開催しました。100名近い参加者を得て、有意義な内容とすることが出来ました。ご協力下さった方々にお礼申し上げます。

天野哲也
(研究部教授／考古学)



[プログラム] (3·4·5は土曜市民セミナー·道民カレッジを兼ねました)

1 記念講演 近年の中国における靺鞨―女真遺跡の主要考古学調査と研究
(吉林大学 王培新)(通訳:専修大学 三宅俊彦)
2 遺伝的特徴から見たオホーツク集団と現代北東アジア集団との関係
(北海道大学 増田隆一·佐藤丈寛)
3 オホーツク集団と続縄文集団の交流 (北海道大学 天野哲也)
4 厚真町幌内地区の発掘調査から解ってきたこと(厚真町教育委員会 小野哲也)
5 アイヌ社会の宝器·鍬形の成立と変遷 (旭川博物館 瀬川拓郎)
6 要害遺跡の研究 (北海道開拓記念館 右代啓視)
7 擦文文化～アイヌ文化の木製品について
(札幌市埋蔵文化財センター 藤井誠二)
8 鍋と玉 (北海道埋蔵文化財センター 越田賢一郎)
9 東北北部におけるアイヌ化を考える (北海道大学 小野裕子)

大学院授業における展示評価とリニューアル提案の取り組み

2009年に開館10周年を迎える当館では、一部の常設展示のリニューアルを検討しています。企画展示専門委員会での検討を経て、2007年度から来館者調査に基づいた展示評価を開始し、同年度前期には「人間·社会·自然と科学技術」展示室を対象にしたトラッキング調査とモニター調査、インタヴュー調査を実施しました。後期には、本学文学研究科の佐々木亨教授のゼミに筆者も参加して、前期に実施した調査のデータ分析に学生達が取り組みました。データ収集は前期にほぼ終えていましたが、学生達もまず実際に数件のデータ収集を担当しました。そして、展示構成要素の特徴を考慮した上で来館者の滞在時間や動線パタン、ストップ·ポイントなどを、比較対象とした別の展示室のデータと併せて点検し、調査対象者の属性と絡めて分析しました。その結果をモニター調査やインタヴュー調査で得た意見と併せて考察し、現状の課題に対応するためのリニューアルに向けた提案をまとめました。続いて、当該展示室の制作を統括いただいた本学工学研究科の小林英嗣教授に分析結果と提案についてご意見を伺いました。更に、小林教授との意見交換も踏まえたゼミの取り組みを博物館スタッフに報告し、評価結果と今後の展開について議論しました。2008年度前期のゼミでは2007年度の取り組みを発展させ、展示内容の修正や追加、展示のアウトプット方法の開発に向けて、工学部へのヒアリングを進めています。



工学研究科小林英嗣教授へのプレゼンテーション

佐々木教授のゼミには「2000年 有珠山噴火―活きる山と生きる―」展などこれまで当館の展示をいくつか企画担当していただきましたが、展示評価に共に取り組んでいただくのは初めてでした。このゼミは、学生達にとっては来館者調査に基づいた展示評価の理念を学ぶだけでなく、調査データを収集して分析し、分析結果を踏まえた提案を行う実践的な演習となりました。彼らはゼミの成果が博物館活動に実際に反映されていく手応えを感じたようです。そして、2008年6月に大阪大学で開催された博物科学会では、筆者だけでなくゼミ生の寺林暁良さんと山田祥子さんもこのゼミの取り組みについて発表しました。学生がこの学会で発表したのは初めてであり、当館の取り組みは好評をいただきました。当館では今後も、大学博物館の活動の様々な場面に学生を主体的に関わらせる教育プログラムを実践してまいります。

湯浅万紀子
(研究部准教授／博物館教育学)

「ロボットフィールドプロデュース」を開催

――異分野の学生が出会い協働し、活動を社会に発信する 場としての大学博物館

総合博物館で2007年12月と2008年1月に「ロボットフィールドプロデュース」が開催されました。小学生とご父兄が個性溢れるロボットを作り、小学生のアイディアに沿ってご父兄が競技フィールドを組み立て、小学生が決めたルールに則って競技が行われました。博物館の展示解説も盛り込まれたプログラムでした。

企画したのは北海道大学工学部のサークル「ロボットアーキテクト」。本学がキャンパスライフを豊かにするための学生の取り組みとして採択した「元気プロジェクト」の1つです。ロボット製作を通してモノづくりを子ども達に身近に感じてもらいたいという彼らの思いに当館は共感し、当館での企画を検討してみないかと提案しました。そしてすぐにこれに応じた彼らとの協働がスタートしました。博物館を単に会場として利用するのではない企画を練ること、博物館でしか実現できない企画を考えること、これが筆者が彼らに与えた課題でした。一緒に展示を見て議論を重ねていく内に、恐竜や現生動物の身体のつくりとロボット製作を関連付けてみようというアイディアが生まれ、博物館で古生物や哺乳類を研究する学生達にも協働に加わってもらうことになりました。そして彼らによる展示解説を交えた企画が練られていきました。その過程で企画書を何度も書き直すように指示しましたが、アーキテクトのメンバーは決して挫けず、却って、大学博物館について知ることができて楽しいと常に前向きに取り組みました。古生物を研究する学生達も、普段の生活では出会うことのない工学部の学生と協働することに新鮮な喜びを感じ、熱心に取り組みました。



2008年1月ロボットフィールドプロデュース

このように議論を重ねて実現した当日の様子は、アーキテクトのHPなどによる報告をご覧いただきたいと思います。1929年に建てられた総合博物館のクラシックな建物で、ロボコンが開催されたのはこれが初めてでしたが、この取り組みの意義はそこにあるわけではありません。参加者アンケートによれば、参加者にとってはモノづくりの楽しさと難しさを知る機会になったこと、それを本学の学生を通して知ったこともその一つです。参加者のお一人から、北海道大学には研究やロボット製作に真剣にそして生き生きと取り組む学生達がいることを知ったのが一番の収穫だったと伺いました。学生達にとっても異分野の学生と出会い協働し、博物館でしかできないプログラムを実現できたことに意味があったのではないかと考えます。そして、当館のボランティアの方々にもご協力いただいてプログラムが実現できたことも、博物館ならではの展開でした。今後も、異分野の学生が出会い協働し、活動を社会に発信する大学博物館独自の活動を続けてまいります。

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

北大カフェプロジェクト@総合博物館

去る2月5日から11日までの1週間、総合博物館2階リファレンスコーナーにおいて、北大カフェプロジェクトによる期間限定カフェがオープンしました。「北大カフェプロジェクト」は学生および教職員からなる団体で、学生が主体となって運営するカフェを大学構内に設置し、専攻や学部の異なる学生同士、あるいは学生と教職員、市民などが交流できる「場」を創造することを目標としています。その場を中心として、学生が自主性や社会性、コミュニケーションスキルなどを身に付け巣立ってゆくことや、地域社会と北大との交流を活発化できればと考えています。将来的にはこうした目的を達成できるようなカフェの常設運営を目標としていますが、プロジェクト実施初年となる2008年は、学生のポテンシャルや経営方針、こうしたカフェの必要性の再確認、最適な設置場所の調査を視野に入れた人のフローと時期の相関関係、イベントとの連動による効果などについて調査を行います。

総合博物館で行われた第1回のカフェは、今や世界的イベントとなったさっぽろ雪まつりと時期を同じくし、2月5日～11日の7日間に設定しました。観光スポットの一つにも数えられ、修学旅行のコースにも入っている北大総合博物館には、この時期にはどのような人がどの程度足を運ぶのか。メニューはどの程度のバラエティがあればよく、何杯分用意すればよいのか。スタッフは何人必要で、何をすればよいのか。全てがほとんど初めての状態で、皆が知恵を出し合って臨むこととなりました。

プロジェクトは学生が主体となって企画運営を行いましたが、この時期は期末テストのまっただ中であり、スタッフ全員が揃って会議することはあまりできませんでしたが、様々な方のご協力もあり、高価でなく美味しいコーヒー豆の選別、ストレート・カフェオレ・カプチーノの3種類のメニュー決定、コーヒーメーカーの準備、雰囲気に合ったカップやトレーの選定、会場設営などを比較的短時間で行うことができました。また期間中は、慣れない作業をぎりぎりの人数で行う場面もありましたが、学生と直接触れ合うことができるということでお客さまからの評判は総じてよく、味や接客などを含めた今後のカフェ運営にとって非常によい機会となったようでした。学生と教職員が共同で作成したアンケートによるカフェに対する意識調査も実施し、ここから得られた学内外の視点を取り入れ、今後のカフェ運営に役立ててゆく予定です。

一方で、短期間での準備ということからスタッフが博物館の建物内部に精通しておらずトイレの場所をきかれて困ったり、博物館の設備やコーナーの機能との整合性が完全でなかったことなど、今後学内の様々な場所でカフェを行う際に注意すべき点も課題として残りました。これらはプロジェクトメンバーへのよい宿題となり、ニュース発行時には既に終了している6月のエルム森でのカフェや、夏に行われる国際学会とのコラボレーションカフェ成功への糧となっているはずです。学内外を問わず様々な交流が生まれる「場」の創造へ向けて、大きな一歩が踏み出されました。

小俣友輝
（研究部助教／博物館情報科学）

2007年度「ボランティア講座＆交流会」を開催



2007年度第2回ボランティア講座&交流会

総合博物館では、約130名のボランティアの方々に標本整理や展示解説など12分野で活動していただいています。ボランティアに登録していただく際には、ボランティア・マネジメント担当の筆者から大学博物館である当館の使命や成り立ち、活動展開、そしてボランティアの役割と位置付けについてご説明し、各分野の担当教員の指導を受けて活動に従事していただいています。更に、2007年度より年2回、ボランティア活動の意義について確認の意味もこめたガイダンスと、博物館に関連した特定のテーマに関する講義、12分野のボランティアの意見交換から成る「ボランティア講座&交流会」を開催しています。

2007年度第1回は11月に開催し、本学高等教育機能開発総合センターの木村純教授に、「博物館の『学び』とボランティア」というタイトルでご講演いただきました。様々な博物館でのボランティア活動導入の経緯や活動内容、位置付けについて、具体例を挙げてご紹介いただき、博物館ボランティアの学びには来館者から学ぶ、ボランティア相互に学ぶ、ボランティアを継続することで学ぶという3種類があること、そしてボランティアが「博物館で学ぶ」だけでなく「博物館を学ぶ」ことが重要であることをご説明いただきました。

第2回は2008年3月に開催し、筆者が「大学博物館における展示解説の現状と課題」について講義し、展示解説の必要性をサイエンス・コミュニケーション、来館者の満足度、来館者研究の視点からご説明し、解説内容の真正性とコミュニケーション・スキルの面から注意事項をお話しました。当館2階に開設されたレファレンス・ルームを活用して、展示解説に関連した活動を展開していく予定もお伝えしました。更に、展示解説ボランティアの寺西辰郎さんに、本学の歴史を紹介する展示室で解説実演していただき、ご自身で調査なさっている膨大な資料をいかに展示解説にまとめているかを説明していただきました。いくつものエピソードをまじえた明快な解説でした。また、研究支援推進員の庄子香織さんから、ボランティアの方々と取り組んでいる解説資料作成の進捗状況が説明されました。

参加者は2回とも約20名であり、ボランティア全員が一同に集まることはできませんでしたが、交流会では参加者お一人お一人から活動状況や展望を語っていただき、ボランティアの会会長の在田一則さんからは会についてご紹介いただき、相互交流を深める機会となりました。

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

カルチャーナイト2008「チェンバロと星空の夕べ」

今年も札幌にカルチャーナイトの夏が訪れます。7月25日の夜、総合博物館は北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット（CoSTEP）と共に「チェンバロと星空の夕べ」を開催します。展示を時間延長して公開する他、北大ポプラ・チェンバロのレクチャー付きコンサートや4Dシアターのプログラム、北大天文同好会によるプラネタリウム、札幌星仲間による夏の星座の観望会などを実施致します。雨天・曇天の場合は変更があります。詳しくは当館HPでご確認下さい。

多くの方々のご来場をお待ちしています。

右記のポスターは、当館4Dシアターボランティアの柳田拓人さん（本学情報科学研究科博士後期課程3年）が制作しました。

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）



平成19年10月から平成20年3月までにおこなわれたセミナー

第179回　「湯川秀樹＆朝永振一郎生誕百年記念展」市民セミナー
「湯川と朝永が切り開いた「中間子論」と「繰り込み理論」」
石川　健三（大学院理学研究院　教授）
日時：9月29日（土）13:30−15:00（参加者約60名）

第180回　「湯川秀樹＆朝永振一郎生誕百年記念展」市民セミナー
「堀健夫の『滞欧日記』を読む―朝永や仲谷との交流もまじえて―」
杉山　滋郎（大学院理学研究院　教授）
日時：10月13日（土）　13:30−15:00（参加者約60名）

第181回　「湯川秀樹＆朝永振一郎生誕百年記念展」市民セミナー
「湯川秀樹の生き方」
田中　一（北海道大学　名誉教授）
日時：10月6日（土）　13:30−15:00（参加者約70名）

第182回　「湯川秀樹＆朝永振一郎生誕百年記念展」市民セミナー
「核爆弾はこうして作られた」
鈴木　久男（大学院理学研究院　准教授）
日時：10月20日（土）　13:30−15:00（参加者約60名）

第183回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「エゾリスの不思議」
南　尚貴（旭川市科学館サイパル　主幹（学芸員））
日時：10月27日（土）　13:30−15:00（参加者約100名）

第184回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「チェンバロから学ぶ・チェンバロを究める―総合大学における音楽学とリベラルアーツ」
藤井　美雪（古典鍵盤奏者／北海道大学総合博物館チェンバロアカデミー講師）
日時：11月10日（土）　13:30−15:00（参加者約90名）

第185回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「北方圏・北東ユーラシアの鉱物資源と熱水活動」
高橋　亮平（大学院理学研究院　博士研究員）
日時：11月24日（土）　13:30−15:00（参加者約60名）

第186回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「善人か悪人か―近松門左衛門の三百年の謎を解く」
冨田　康之（大学院文学研究科　教授）
日時：12月8日（土）　13:30−15:00（参加者約90名）

第187回　「水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史」展市民セミナー
「水産学部100年の歩み」
原　彰彦（水産学部長）
日時：12月18日（火）　13:30−14:10

第188回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「大量絶滅の科学：生命進化のメカニズムを探る」
磯崎　行雄（東京大学大学院総合文化研究科　教授）
日時：12月22日（土）　13:30−15:00（参加者約130名）

第189回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「博物館は必要とされているか?―評価からみえてきた課題」
佐々木　亨（大学院文学研究科　准教授）
日時：1月12日（土）　13:30−15:00（参加者約100名）

第190回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「寄生するハエの生活―ヤドリバエ―」
舘　卓司（大学院理学研究院　博士研究員）
日時：1月26日（土）　13:30−15:00（参加者約60名）

第191回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「中世日本列島北部―サハリンにおける民族の形成過程の―市場経済圏拡大の観点から―」
天野　哲也（大学院理学研究院　教授）
小野　哲也（厚真町教育委員会）
瀬川　拓郎（旭川市博物館　学芸員）
日時：2月9日（土）　10:30−14:45（参加者約130名）

第192回　「ウズベキスタンの現代建築と世界遺産」展市民セミナー
「陶器からみたウズベキスタン」
菊田　悠（スラブ研究センター　日本学術振興会特別研究員）
日時：2月16日（土）　13:30−15:00（参加者約50名）

第193回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「深海掘削による地価生物圏の探索」
齋藤　裕之（大学院理学研究院　博士研究員）
日時：2月23日（土）　13:30−15:00（参加者約60名）

第194回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「子どもの音楽活動に見る言語・教育の影響―カナダ人と日本人の比較から―」
安達　真由美（大学院文学研究科　准教授）
日時：3月8日（土）　13:30−15:00（参加者約60名）

第195回　北大総合博物館前館長　藤田正一氏　退官記念講演
「青春に悔いなし―「都ぞ弥生」「We Shall Overcome」にかける橋」そして「都ぞ弥生」再び」
藤田　正一（大学院獣医学研究科　教授）
日時：3月19日（水）　13:30−16:30（参加者約100名）

第196回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「海底のメッセンジャー：底生有孔虫」
石村　豊穂（大学院理学研究院　博士研究員）
日時：3月22日（土）　13:30−15:00（参加者約70名）

平成19年10月から平成20年3月までにおこなわれたシンポジウム

第 21回　総合博物館国際（公開）シンポジウム
「北東アジアの植物多様性：被子植物の分類・地理」
「Plant Diversity in North-Eastern Asia: Taxonomy and Geography of Angiosperms」
日時：1月13日（日）13:30−16:30（担当：高橋）（参加者約60名）

第 22回　総合博物館国際（公開）シンポジウム
「中世日本列島北部～サハリンにおける民族の形成過程の解明―市場経済圏拡大の観点から―」
日時：2月9日（土）9:00−16:30（担当：天野）（参加者約130名）

平成19年10月から平成20年3月までにおこなわれたCOEパラタクソノミスト講座

10月6日（土）
きのこパラタクソノミスト講座（初級）　小林孝人・高橋英樹（参加者12名）

10月13日（土）～14日（日）
原生動物パラタクソノミスト講座（初級）　盛下　勇・島野智之（参加者11名）

10月27日（土）～28日（日）
ハエ目昆虫パラタクソノミスト講座（中級）
戸田正憲・舘　卓司・廣永輝彦（参加者10名）

11月10日（土）～11日（日）
海鳥の解剖および仮剥製講座（中級）　綿貫　豊・市川秀雄（参加者12名）

11月23日（金）
化石パラタクソノミスト講座（初級）　小林快次（参加者16名）

11月24日（土）～25日（日）
岩石パラタクソノミスト講座（中級）　在田一則・松枝大治（参加者10名）

12月8日（土）～9日（日）
鉱石・鉱物パラタクソノミスト講座（中級）　三浦裕行・松枝大治（参加者10名）

1月26日（土）～27日（日）
甲虫目昆虫パラタクソノミスト講座（上級）　大原昌宏・澤田義弘（参加者12名）

3月1日（土）～2日（日）
鉱物パラタクソノミスト講座（上級）　三浦裕行（参加者5名）

3月8日（土）～9日（日）
鉱床パラタクソノミスト講座（上級）　松枝大治（参加者5名）

平成19年10月から平成20年3月までの主な出来事

10月10日　企画展示「写真で見るカジカ類の多様性」10／10−11／4
10月16日　上海交通大学学長御一行（3名）
10月30日　文部科学省学術研究助成課予算総括係長他（3名）
11月 2日　東京大学・外部資金戦略グループ職員（5名）
11月12日　平成19年度中国青年指導者（30名）
11月26日　韓京大学農業生命科学部御一行（10名）
11月30日　フィンランド大使御一行（7名）
12月18日　企画展示「水産科学館　総合博物館分館化記念・水産学部創基100周年記念「水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史」」12／18−2／17
1月13日　国際シンポジウム「北東アジアの植物多様性：被子植物の分類・地理」「Plant Diversity in North-Eastern Asia:Taxonomy and Geography of Angiosperms」
1月15日　企画展示「黒曜岩展示」1／15−3／31
1月21日　客員研究員　Saida Rasnovi講師（Syiah Kuala大学数理学部生物学科）1／21−2／18
1月22日　企画展示「ウズベキスタンの現代建築と世界遺産」1／22−2／24
1月29日　韓国・忠北大学校総長御一行（5名）
2月 9日　国際シンポジウム「中世日本列島北部～サハリンにおける民族の形成過程の解明―市場経済圏拡大の観点から―」
2月28日　中国医科大学口腔医学院（7名）
3月 4日　企画展示「ボタニカル・アート展―植物学と芸術の出会い」3／4−4／13
3月 7日　文科省生涯学習政策局調査企画課専門調査係長他（3名）
3月11日　企画展示「北海道大学写真同好会第10回写真展「しあわせのかたち」」3／11−3／30
3月13日　大阪市立大学大学史資料室（1名）
3月18日　エストニア・タルトゥ大学学長御一行（3名）
3月28日　マサチューセッツ大学学長御一行（2名）

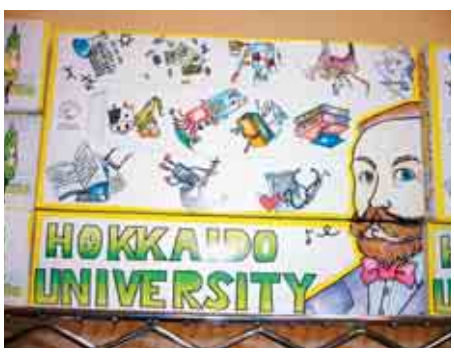
ミュージアムショップに新商品が加わりました

昨年（2007年）12月26日（水）、総合博物館2階から1階正面入り口右側に移転しました「ミュージアムショップ」は、おかげさまで順調に営業を続けています。新たな商品も販売していますので、そのいくつかをご紹介します。多くの皆さまのご利用をお待ちしています。





お菓子も増加



文・教・法・経・理・医・歯・薬・工・農・獣医・水産がデザインされているボックスティッシュ


北大オリジナルTシャツが増えました

入館者数（平成19年10月～平成20年3月）

	入館者数	見学団体数	解説の件数	企画展示（略称）
10月	7,863	23	3	「恵迪寮」展 「カジカ類の多様性」展
11月	6,858	12	6	「カジカ類の多様性」展
12月	2,948	4	1	「水産学部100年の歴史」展
1月	1,760	2	2	「水産学部100年の歴史」展 「ウズベキスタン」展 黒曜岩展示
2月	3,121	5	1	「水産学部100年の歴史」展 「ウズベキスタン」展 黒曜岩展示
3月	4,551	7	5	黒曜岩展示 写真同好会写真展 「ボタニカル・アート」展

お知らせ

●持田誠さん、有馬理恵さんのお二人が研究支援推進員として平成20年4月に採用されました。

◆

●平成19年12月に移転しましたミュージアムショップの跡地にレファレンスルームを開設しました。常駐ではありませんが、研究支援推進員が入館者からの質問・外部からの問い合わせに対応します。また、展示解説ボランティアの活動拠点としても位置付けております。

●企画展示「ライマンと北海道の地質―北からの日本地質学の夜明け」が平成20年4月29日から平成20年6月1日まで開催されました。

●平成20年5月18日、国際博物館の日に総合博物館バックヤードツアー（博物館探検）を行いました。

●北海道大学サステナビリティ・ウイーク2008関連企画展示「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」が平成20年6月17日から平成20年8月30日までの予定で開催されています。

●北海道大学サステナビリティ・ウイーク2008関連シンポジウム「新・自然史科学創成：自然界における多様性の起源と進化」（6月27日）とSymposium "Taxonomy Returns"「分類学の帰還」（6月28日～29日）が開催されました。

お　礼

以下の方々に、学術標本作製・企画展示準備等で協力いただきました。謹んでお礼申し上げます（平成19年10月～平成20年3月）。

植物標本：青野恵美、石原　亘、奥本陽子、桂田泰恵、金上由紀、北道米雄、久保田歩、黒田シヅ、甲山幸子、笹森明子、須田　節、鈴木順子、高桑徳宏、高橋友美、高橋美智子、田中由香、土屋妙子、永山和樹、平原昭子、古田暁宏、三浦美恵子、山田菜月、与那覇モト子。

昆虫標本：青山慎一、石橋舞子、梅田邦子、大矢朗子、喜多尾利枝子、木下真裕実、櫛引靖子、久万田敏夫、坪山佳織、永山　修、西川小織、松本千春、宮　敏雄、宮本昌子、村井容子、山本ひとみ。

考古学系：木下真裕美、木村麻衣子、齋藤美智子、比留間俊文。

地　学：岡田美佐子、生越昭裕、神村奏恵、佐藤和子、甲山幸子、堺　俊樹、寺西辰郎、鳥本准司、福地伸章、三浦貴生、安田　正、山崎敏晴。

情　報：織田菜摘、牧野麻子、村上英樹。

化　石：相原大介、石橋七朗、菊地香織、田中嘉寛、寺西辰郎、中野　系、納富昌宏、萩原　茜、安田　正。

北大の歴史：寺西辰郎。

展示解説：相原大介、在田一則、石田祐也、石川満寿夫、石橋七朗、稲荷尚記、片岡珠理、河本恵子、児玉　諭、齋藤美智子、田中康平、田中嘉寛、寺西辰郎、鳥本准司、永山　修、中野　系、成田敦史、西川小織、沼田勇美、林　昭次、星野フサ、村井容子、持田　誠。

平成遠友夜学校：秋葉雄太、安藤亮太、石田多香子、石本昌之、河野歩実、齋藤美智子、田中敏夫、沼田勇美、見山智宣、村井容子、横田麦穂。

4Dシアター：荻田雄輔、久保拓士、佐藤祐介、清野和之、曽根哲朗、羽部朝男、松井秀徳。

チェンバロアカデミー：安達真由美、大矢朗子、北川高之、久住千佳子、佐藤浩輔、佐藤万記子、清水聡子、高橋友子、新妻美紀、藤井健吉、村上英樹。

ロボットフィールドプロデュース（平成19年12月・20年1月）：石田祐也、越前谷宏紀、生越昭裕、菊地香織、佐藤久美子、嶋野月江、田中康平、田中嘉寛、林　昭次、望月直。

（敬称略）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
北海道大学総合博物館ニュース　第17号
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
北海道大学総合博物館ニュース
編集：松枝大治・星野祐子
発行日：2008年（平成20年）7月
発行者：馬渡駿介
発行所：北海道大学総合博物館
住所：060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
電話：011-706-2658・FAX：011-706-4029
E-mail：museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/
印刷：株式会社アイワード